

醜い獣、或いは。

いくらう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

獣狩り、上位者狩り。

# 目次

狩人の悪夢

醜い獣、或いは。

1

或いは、聖剣の。

10

漁村

呪いの果て

26

果て無き狩路

37

## 狩人の悪夢

醜い獣、或いは。

「おおおおおおおっ!!」

薄暗い大広間、そこに男の叫び、そして轟音が響き渡る。

声の主は奇妙な出で立ちの男だ。彼はかつてこの地を訪れた官憲隊の隊服に身を包んでいる。だが特筆すべきはそこではない。彼が頭に被っているのはバケツのような形状の鉄兜。覗き穴が開けられているとは言え、真つ当な防御効果など望むべくもない代物である。それは『彼ら』にとつては特別な意味のある一品であるが、それを知らぬものにとつては奇怪なものだ。

彼は今正に、〈大物狩り〉に身を投じていた。

この周辺で処分された、あるいは狩り殺された者達が廃棄され続け、いつしか〈地下死体溜り〉と呼ばれるようになった場所。そこに単食う恐るべき〈怪物〉を相手取り、自身の得物である槌鉾を怪物に叩きつける。

『ガアアアッ!』

しかし、怪物はその一撃を受けると明らかな苛立ちを見せ、その巨体を回転させることで男を弾き飛ばした。男はその勢いのまま死体の山に突っ込み、しかしそれが衝撃を吸収したのかその場からすぐさま這いだし飛び退く。次の瞬間、大きく跳躍していた怪物が着地し、凄まじい衝撃と共に屍を蹴散らした。

血煙が吹き上がり視界が閉ざされる。それに男を見失ったのか、真つ赤な血煙の中に浮かび上がる白い肌の怪物は歪な鉤爪を振り回し、咆哮し、血煙を払いのけて行く。人が触れれば忽ちに解体されてしまうであろう爪撃の嵐。その間隙に飛び込む影が一つ。

「はあっ!」

先ほどの官憲の男とは別人。露出の殆ど無い、厚手の一般的な〈狩り装束〉に身を包んだ人物は大振りになった鉤爪を掻い潜り、怪物の懐へと到達していた。

気合と共に振るわれたその得物は折り畳まれた鋸。それは怪物の皮膚を効果的に引き裂き、少なからず傷を与えて行く。

『ヴァアアアッ!』

怪物は足元の人物を引き裂かんとするが、その歪な巨体にはずいぶん難儀なことらしく動きに勢いが無い。その隙を見て取ったその人物は振るわれた鉤爪を悠々と回避し、その隙にこれでもかど鋸を振るって怪物の下腹部をズタズタに引き裂く。

血飛沫が上がり、怪物が膝を折った。その人物はそれを好機と見て取り、さらなる連撃を仕掛けんとする。

「下がりましたえ、〈狩人〉!」

だが後方から叫ばれたその言葉に反応し、〈狩人〉と呼ばれた人物は跳ねるように飛び退く。その瞬間怪物は屈んで蓄えた力を一気に開放し、遥か高くまで跳躍した。

アレに巻き込まれれば引き千切られ、彼らの仲間入りをしていただろう。

撒き散らされた血飛沫と屍に自らを重ね、自身がそうならなかった事に安堵する狩人。しかしその安堵も束の間、自身の頭上から血が滴るのに気づいた狩人は全速力でそこから距離を取った。その刹那、取り付いていた天井より落下してきた怪物が狩人の元居た地点を踏み潰す。間一髪で屍たちの仲間入りする危機を脱し距離を取った狩人は、着地の衝撃に耐える怪物と改めて睨み合った。

怪物は腹部から出血してはいるもののその四肢——四肢というには些が多いが——には力が漲り、馬に似た頭部にある濁り切った眼には殺意と憎悪を滾らせている。背に嘗て英雄と称された頃の名残と思われる大剣を背負い、引き裂かれた白布を纏い、それを突き破り生やした異形の鉤爪は一刻も早く狩人を引き裂きたいといった風に蠢く。口からは聴くに堪えぬ悍ましい呻きが漏れ出し、さらには首から生じた第二の頭部、口のみが存在し際限なく唾液を垂れ流す悍ましい器官は先ほどからより強く蠢いている。

「無事かね? 狩人」

「すまない、ヴァルトール」

睨み合い、互いに動きが止まった中で、狩人の横に先ほど怪物に槌  
鉾を打ち込んでいた官憲の男が並び立った。

「醜い獣」とはよく言ったものだな……いや、想像以上だ、アレは。今  
まで見たどの獣よりも悍ましい」

ヴァルトール、と呼ばれた官憲の男の言葉を狩人は首肯する。僅か  
にでも視線を逸らせばその瞬間に引き裂かれかねない程の殺意を彼  
らは感じ取っていた。

「……どうする？」

「鋸は随分と通じたようだな。ここは一つ、先人の教えに従ってみよ  
うか」

狩人の問いに一人納得すると、ヴァルトールは手に持っていた得物  
を背に回し、その『仕掛け』を起動する。彼が背負っていた、円盤を  
いくつも重ね合わせた形状の巨大ノコギリが槌鉾の先端に装着され、  
ヴァルトールはそれを怪物、〈醜い獣〉を威嚇するかのよう振り回し  
た。

『獣に鋸、眷属に剣』か」

狩人は懐から『火炎ヤスリ』を取りだし折り畳まれた鋸——『ノコ  
ギリ鉾』——に擦り付けた。その瞬間ノコギリ鉾を炎が包み、それを  
見たヴァルトールは感心したように炎に視線を向ける。

「おっと、その手もあったか。俺にもひとつ分けてくれないか？」

「——来るぞ！」

ヴァルトールが視線を逸らした瞬間を醜い獣は見逃さなかった。  
第二の頭部が膨れ上がり、その口内にびっしりと存在する眼が彼らを  
凝視する。その視線に凄まじい殺意を感じ取った狩人とヴァルトー  
ルはそれぞれ左右に跳躍した。しかし醜い獣はそれを読んでいたか、  
あるいは初めから狙っていたのか狩人に第二の頭部を向ける。

「狩人！」

ヴァルトールが警告を飛ばさんとする。しかしそれに先んじて醜  
い獣は悍ましい攻撃の準備を完了させていた。

「走りたまえ！」

その言葉と共に醜い獣の第二の頭部から大量の液体が噴射された。

その液体は輝きながら広範囲に撒き散らされ狩人に迫ってゆく。ヴァルトールの警告に従った狩人は醜い獣に躊躇なく背を向け駆け出す。液体による攻撃は徐々に狩人を部屋の隅へと追い込む。狩人がそれに巻き込まれるのも時間の問題かと思われた瞬間、周り込んでいたヴァルトールが醜い獣に躍り掛かった。

「撒き散らしたまえよ、獣！」

金切り音とともに起動した『回転ノコギリ』は醜い獣の脇腹に叩き込まれ、肉を血を臓物を飛び散らせる。たまらず醜い獣は液体の噴射を継続できずに仰け反り、ヴァルトールはそこからの踏み付けを警戒して跳び下がる。しかし彼の警戒とは裏腹に醜い獣は悍ましい鳴き声こそあげたものの暴れはせず、よろよろと倒れ掛かる。

狩人らの狩り、その中でも『大物狩り』とされるその中で唐突に訪れる好機。二人の熟練の狩人はその到来を見逃しはしなかった。

〈秘儀〉を用い、凄まじい〈加速〉に乗った狩人がよろめく獣に襲い掛かる。その得物は今だ炎に包まれ、獣に対する有効性を残したまま。狩人は自身の顔に火がちらつく事も全く厭わず、ヴァルトールが抉った脇腹の傷をより複雑に、より大きく斬り広げて行った。ヴァルトールもそれに乗じて醜い獣の体勢をさらに崩すよう、多くの脚の中でも重心が乗った足を狙い回転ノコギリで挽き裂きにかかる。

『オ———オオオオッ!!』

決断的に彼を解体せんとする狩人らの攻撃に晒され、浅くない傷を負った獣は賭けに出た。第二の頭部が一気に膨張する。先ほど狩人に放った液体を撒き散らし二人を撃退せんとする反撃。この距離であれほどの濁流を浴びればそれで此度の狩りは決するだろう。しかしそれは狩人達にとって更なる好機の到来に過ぎなかった。

最大限に膨張した頭部に向かって狩人の散弾銃が火を噴く。〈灰〉を用い威力を底上げした一撃。彼の用いる〈獣狩りの散弾銃〉は殺傷力は乏しいものの衝撃力に重点を置き、体躯の大きな獣でさえよろめかせられるよう設計された武装だ。狩人はそれを獣が体面積を増やした瞬間に撃ち込むことで、その巨体をも押し返すほどの衝撃を生じさせることに成功していた。

第二の頭部を大きく弾かれた醜い獣は後方に向け液体を撒き散らす。そして、そこに生まれた好機を逃すヴァルトールではなく。その大得物を抱えた姿からは考えられぬ脚力で獣の体を駆け上り、一気に第二の頭部まで到達し、その全身を狩りの喜びに躍動させる。大きく仰け反ったヴァルトールは回転ノコギリを逆手に持ち替え、起動させ、その切っ先を第二の頭部、その口内に叩き込んだ。

『ガアアアアアアアツツッ!』

本来の口から悲鳴を上げ、醜い獣は暴れ出すも、深々と口内に突き立てられた回転ノコギリが楔の役割を果たし、ヴァルトールは離れず、攻撃を緩めることも無い。

「はははははは!!」

獣の返り血を浴びながらヴァルトールは大笑する。まさにそれは嘗て〈獣喰らい〉と渾名された彼にふさわしい姿だ。それとは対照的に狩人は醜い獣から距離を取ってその狂乱を観察しつつも、ありったけの飛び道具を放っていた。黄衣の狩人から技を盗んだ投げナイフ、医療教会製の毒メス、火炎瓶、古狩人の爆発仕掛け。ここぞとばかりに手持ちのそれらを投げ放つ。

「随分と耐えるじゃあないか! まったくうんざりだ! はははは!!」

未だ醜い獣に取り付いたヴァルトールは第二の頭部に突っ込んだ回転ノコギリに時折力を加え、その内部を隈なく引き裂いてゆく。さしもの醜い獣もこれは耐え難かったか、徐々にその動きが緩慢となつてゆき、遂には地に膝を着いた。

「……………ここまでかね?」

ヴァルトールは先ほどの狂笑が嘘のように冷静さを取り戻し、その様を見やる。狩人もまた、蹲ったかのような醜い獣の姿を見つめていた。息はまだある。しかし十分に致命傷だ。

「ヴァルトール——」

止めを、と言いかけた狩人はそこでその姿に既視感を感じる。その蹲った姿は、先ほど自らの眼前で見た姿に良く似ていた。その次に、醜い獣が起こした行動は何だったか——



「——離れる!!」

狩人の叫びにヴァルトールは即座に反応した。あれほど確<sup>しか</sup>と握っていた得物を手放し獣の体を蹴り飛び退く。次の瞬間、醜い獣はこれまでに無い力を振り絞り跳躍した。しかし、ヴァルトールはその背からは既に離れ。満身創痍の獣は嘗てのように天井に取り付くことはできず、勢いそのままに天井に叩きつけられる。

轟音とともに天井に叩きつけられた獣は小さなうめき声をあげ、そのまま落下して来た。狩人とヴァルトールは可能な限り離れ、その様子を見守る。

衝撃。

地に叩きつけられた獣の全身はひしゃげ、それにより獣の口内に突き立てられていた回転ノコギリ、そして醜い獣が背にしていた大剣が宙を舞い放り出される。回転ノコギリは屍を巻き込んで転がり、大剣は墓標めいて血溜りに突き刺さった。

醜い獣に既に力はなく、最後に一度、頭を持ち上げようとする。しかしそれはもはや叶わず、そのまま醜い獣は頭を垂れ、動かなくなつた。ヴァルトールはそれを見て、今度こそ安堵のため息を漏らす。

「……………今度こそ終わったかね。いや……………最後は助かった。〈連盟〉の長として、狩りを共にした者として、礼を言おう、狩人」

「……………私も一度、救われている」

「そうだったか? ああ、そうだったか……………まあ、狩りも無事終わりで。貸し借り無し、それで良しとしようじゃあないか」

「ああ」

狩人のぞんざいな返答にヴァルトールは肩をすくめた。だが狩人が大してそれに反応しないのを見て取るとヴァルトールも諦め、屍に埋もれかけた自身の得物を回収し、振るって血や油を散らして行く。狩人も同様にノコギリ鉋に付着した血を振るい落としつつ、〈狩人の夢〉へと通じる縁である〈灯り〉を探し周囲を見渡す。強大な獣を狩り倒した際には如何なる仕組みか、決まって〈夢〉への灯りが現れていた。しかし今回それが見当たらず、僅かに困惑する。

——屍の山の陰にでも隠れているのか。だが既に十二分な啓

蒙と、三本の〈三本目〉を得、超思索の端に踏み込みかけた狩人は直観的にそれを否定した。そのまま思考の海に沈もうとした所で、ヴァルトールに声をかけられる。

「狩人。私は一旦、ここでおさらばだ。この後君はどうするのかね？ 狩りを続けるのであれば我ら連盟、また君と狩りを共にする機会もあると思うが」

「先へ進む。この悪夢を暴く」

「それは、何故かね？」

問いに狩人はヴァルトールに向き直り、重々しく口を開く。

「狩りを全うするために。我ら狩人の源流たるビルゲンワース……その罪が、悪夢の果てにあると言う。私にはそれを知る権利と義務がある」

「何故狩りを全うしよう？」

「夜明けのため。夢は覚めるもの。それに囚われる狩人など、私が最後であるべきだ」

「……まったく、君も程々に狂っているな」

「自覚はある」

その返答にヴァルトールは小さく、しかし愉快そうに笑った。

「……はは、そうか、そうかね！ ならば止めはせんよ。もし我らへ連盟の者と道中共鳴したならば、遠慮なく呼びだすといい。きっと君の力になる」

「助かる。貴方は？」

「私はしばしこの悪夢で狩りを続けるつもりだ。探している獣がいてね。〈彼〉を狩る際には、是非君の力を借りたいものだ」

「縁があれば、駆けつけよう」

「はは、そうか、言質は取ったぞ？ ……では狩人、私はここらでお暇するでしょうか」

「ああ。それでは、また」

狩人の返答を待たず、ヴァルトールは回転ノコギリを元の形に戻し、自身の踏み入ってきた入り口へと踵を返し立ち去る。同様に狩人はさらなる奥へと歩みを進めようとした。灯りはこの場には無い

と判断し、横たわる醜い獣の死骸を避け、先へ進むべきと考えた。

——しかし狩人は足を止める。狩人の直感、あるいは〈瞳〉が、匂い立つ脅威を、自身の死を脳裏に過ぎらせた故に。

『ああ』

声が出た。この場にいる二人とは別の『人間』の声。しかしそれは伏した『獣』から発せられたもので。

『ずっと、ずっと側にいてくれたのか』

血溜りに突き立った大剣が、いつの間にか凄まじい神秘を、宇宙の深淵の色、星の輝きを放っている。

『我が師』

既に屍になったと思われた、醜い獣であった者が立ち上がり、大剣、否、聖剣を手にする。その姿は醜い獣そのままでありながら、その纏う空気はそれではなく、嘗て市井の狩人を率いた、英雄と呼ばれた者の姿。

『導きの月光よ——』

彼は手にした〈月光の聖剣〉を掲げ、自身の前に構え直す。その眼は破壊衝動に満たされた獣のそれではなく、確かな理性を持つ人間の物。狩人の全身に寒気が走る。今まで感じたものの中でも最大級の脅威。それも獣の暴力的なそれではなく、まして狂った狩人達の狂氣的な、あるいは享樂的な殺意でもなく。

「何たることだ」

いつの間にか狩人の隣まで戻っていたヴァルトールも、その脅威を感じ取ったか既に回転ノコギリを変形させ身構えている。

「獣が人を取り戻した？ありえるのか、そんな事が」

「……ありえん」

「ならばアレはなんだ？悪夢の中で、夢でも見ていると？」

「……夢ならば、どれほど良いものか」

ヴァルトールに答えた狩人はノコギリ鉋を変形、鉋の形態にし再び加速を纏う。ヴァルトールも回転ノコギリを構え、獣を——否、

彼の持つ、その聖剣を注視する。

「あの眼、何よりあの剣。<sup>つるぎ</sup>まさか、いや、本当に人を取り戻したと？  
ならば、ならば今の奴は〈醜い獣〉などではなく——」

言い終わらぬ内に、醜き獣であった者が構える。その構えは数多の  
死線を越えた剣士のもの。その姿に狩人は更なる戦慄を覚え。

「——〈聖剣のルドウイク〉？」

その言葉が引き金となったかのように、ルドウイクは〈月光〉を  
振り抜いた。

或いは、聖劍の。

もはや〈地下死体溜り〉は、災害の最中さなかの如き様相を呈していた。奇怪なる装束に身を包み、これまた普遍的な得物とは言えぬ〈回転ノコギリ〉を操る、〈連盟の長〉ヴァルトール。

対照的に一般的な狩装束を纏い、これまた彼ら〈狩人〉の得物としては一般的な〈ノコギリ鉋〉を操る名も知れぬ〈狩人〉。

今、彼らは地下死体溜りを縦横無尽に駆け巡り、嘗て無い大物狩りへと挑んでいる。その中心には巨大な一体の獣——であつた者。

姿形は悍ましき〈醜い獣〉でありながら、理性と信念を宿した瞳を彼らに向け、彼のみが携えた〈月光ムーンライトの聖劍〉を振りかざす。彼の者の名はルドウィーク。教会最初の狩人であり、嘗て英雄と呼ばれ、獣狩りの最前線に立った男。

人より獣へと堕ち、そして如何にしてか人を取り戻した、正真正銘の怪物人。

「狩人！」

「ちいっ！」

ヴァルトールが狩人へと叫ぶが早いか、ルドウィークの聖劍がその身を屠らんと振り下ろされた。〈加速〉に乗った狩人は寸での所でその刃の軌道から身を離し飛び退くが、一所ひととこに身を置く事無く走りだす。

『ハアッ！』

そこを狙い、ルドウィークの掛け声と共に振るわれた月光。その軌道は狩人の身体を断ち切るには些か離れすぎている。しかしその輝きの軌跡を写し取るように光が波となり狩人に襲い掛かった。

しかし狩人は〈光波〉による追撃を超思索の元予期しており、弾かれるが如くその場から飛び退いて回避。その間にヴァルトールはルドウィークの後方より接近し回転ノコギリを起動、ルドウィークの右後ろ脚を切り刻まんと突撃する。

『ムウン！』

「ぬおっ!？」

その金切り音に気づいたルドウィークは体をズラし、振り払うかのように後方へと月光を向けた。たまらずヴァルトールは飛び退いて距離を取る。幾度目か解らぬ仕切り直し。狩人とヴァルトールは未だ大きな傷もなく健在だが、両者ともに疲労の蓄積は隠せていない。対してルドウィークは静かに彼らを見据え、聖剣を油断なく構えている。

「……ヴァルトール、あの剣は一体？」

いつの間にかヴァルトールの横にまで駆けて来ていた狩人が、呼吸を整えつつ問いかけた。それに、息を切らしながらもヴァルトールは口を開く。

「俺とて、知る事と知らん事が……いや、いつか聞いたことはある。

『ルドウィークの剣は刃に非ず』と」

「真なる〈神秘〉か。肌が粟立<sup>あわ</sup>つ」

「……良く分からん。そも、かのルドウィークとこうして相対しているのが信じられぬ事態であるが……」

先ほど〈醜い獣〉を狩らんとしていた時以上の警戒をもって聖剣を見据える狩人。聖剣は星を散りばめた宇宙、渦巻くような、吸い込まれそうになるような翠緑の輝きを放って地下死体溜りを淡く照らす。それは、中途半端に啓蒙を得たものであれば文字通り引き込まれ、前後不覚ともなりかねぬ生粋の神秘の塊だ。しかし、それを確たる意志で睨み続ける狩人に、今度はヴァルトールが問いかけた。

「狩人。何故、ルドウィークは仕掛けてこない？」

「……恐らくだが、奴の剣技は人のそれだが、体は獣のままだ。畢竟、目覚めたばかりで、『慣れてない』のだろう」

狩人の答えにヴァルトールは危機感を抱いた。ルドウィークが人を取り戻してまだ時間は経っていない。要するに、ルドウィークは獣の体で人の剣を振るう事に慣れていないのだ。そもあれほどの異形でありながら真つ当に剣を振るう事自体が相当な無茶であるのやも知れないが、それでもその技巧は脅威と言って余りある。しかしそれがもし『慣れてしまえる』ものならば、それは――

『……夜にありて迷わず、血に塗れて酔わず』

ルドウィークの声がその思考を中断させる。獣からは聞こえるべくも無い、理性持つ人の言葉。

『罪知らぬ狩人達よ』

どこか懐かしむような言葉、それは嘗て、彼が英雄と呼ばれていた頃の名残なのか。狩人達は何時でも飛び出せる様腰を落とし、攻撃の瞬間に備える。

『獣は呪い、呪いは軛……その因果に挑むに足るか』

ルドウィークは月光を顔の横まで持ち上げ、その切っ先をこちらに向けた構えを取る。

『証明して見せろ』

その言葉と共にルドウィークが踏み込み、瞬間二人の狩人は片や超思索に、片や経験と直観に従い跳躍した。

『――導きの月光よ！』

次の瞬間、〈奔流〉とでも呼ぶべき光の炸裂が彼らの元居た場所を轟音と共に吹き飛ばし、消し飛ばす。その余りの威力に、積み上げられていた軀の山もその存在が不確かな物であったかの如く消え失せ、目に見えて〈死体溜り〉を満たす血河の嵩が増している。だがしかし、血煙漂うその跡地から飛び出す影一つ。

『オオオッ!!』

ぶちまけられた死体の血と臓物に塗れ、紛れ、狩人が〈加速〉を以って疾駆する。その速度は獣どものそれすら凌駕し、突き出されていたルドウィークの腕が引かれるよりも素早くその青ざめた肌に一閃を見舞った。

『ヌウツ……!』

「語るはそれだけか、〈聖剣の狩人〉」

〈鋸〉を〈鉞〉と成し、更なる連撃を見舞いつつ狩人が凄む。〈加速〉の最中より繰り出される間断無き連撃。時に鉞による大ぶりな一撃を、と思えば突如折り畳まれた鋸による重心の変化を利用した連続攻撃。その変幻自在な攻めにルドウィークは一転、防御に回る。

それを見逃す狩人ではない。右上からの振り下ろして鋸を鉞へと変形させつつ、勢いそのまま反時計回転。裏拳じみた動きで散弾銃を

向け発砲しルドウィークの動きを制限すると、更に右腕を伸ばして遠心力を最大限に生かした横薙ぎに繋げる。その破壊力は、宇宙色の煌めきによってそれを防いだルドウィークの巨体を数歩後退させるほどの威力であった。

「良い気魄だ！」

不安定な姿勢のルドウィークに、嘗て獣喰らいと呼ばれた異様の狩人が飛びかかる。裂帛れっぱくの気合と共にその得物たる回転ノコギリが火花を散らし、英雄の血肉を引き裂かんと唸りを挙げその肌を掠めた。掠めただけだ。

ルドウィークはその多脚を器用に動かし、崩れた姿勢のままヴァルトールの誇る牙より逃れる。そして振り上げた月光によって謎めいた顔を隠すバケツ兜を弾き上げた。

「がっ!？」

余りの衝撃に容易く吹き飛ばされたヴァルトールの体を、一瞬で切り返した月光を以って真つ二つに別たんとするルドウィーク。しかしそれは逆方向から飛びかかった狩人の攻勢によって中断され、再び彼は引き下がる。

それを見逃す狩人では無い。狩人は遺骨を掲げ、更に〈加速〉を延長し勢いそのままルドウィークに幾つかの狩り道具を投げつけた。ルドウィークはそれを空中で撃ち落とさんと月光を構えたが、咄嗟に月光を引いてさらに距離を取る。その目前に投擲物を追い越した狩人が迫った。

道具と加速を用いた時間差の二段攻撃。しかしこの連携を見抜いたルドウィークは足元に向け月光を振るい、その光の炸裂によって狩人を退けた。その後ろで地面に叩きつけられた壺が音を立てて砕け、中に詰められた油が血だまりに混じって広がってゆく。

仕切り直しか。ルドウィークが目を細めたその瞬間。

「狩人オ！ 〈ヤスリ〉を寄越せエ！」

その声に反応した狩人は吹き飛ばされ血だまりを転がりながらも懐からそれを取り出し声の方向へと思い切り放り投げた。

そこにはかち割られかけたバケツ兜の割れ目からぎらぎらと光る



眼を覗かせるヴァルトール。彼は変形させた回転ノコギリを振るい、機構を始動させながら宙を舞うヤスリにその横つ面を叩きつける。瞬間、摩擦により回転ノコギリは炎に包まれ、彼は松明の如き様相を成すそれで思い切り地面を削り上げた。

『これは……!』

その一撃により、既に脛まで嵩を増した血だまりに散った油が激しく引火し、削り上げられた肉と混じりルドウイークに襲い掛かる。しかし、それを易々と受けるルドウイークではない。既に獣の肉体への慣れを見せ始めた彼は、多脚による平行移動で炎の飛沫より逃れ、下手人であるヴァルトールに向けて月光の切っ先を構えた。それは、先程死体の山を吹き飛ばした〈奔流〉の構え。月光が深く輝き、その力を解き放つ。

だがそれは、死体の山の頂上から跳躍した狩人から放たれる凄惨なる殺意によって阻まれた。完全なる奇襲、だが自身に注意を引きつけんとするその殺気に電撃的な速度で反応したルドウイークが無理矢理に月光を振り上げ、狩人の振るうノコギリ鉋を凝縮されし神秘の放出によって死体の山の向こうへと弾き飛ばす。

しかし狩人は既にノコギリ鉋を手放しており、ルドウイークの眼前へと着地。そして迷わず足元の屍より肋骨を引き剥がしてその切っ先を無防備な腹へと突き立てた。

「……チッ!」

その決断的な一撃を、ルドウイークは意にも介さぬ。一度は獣と化したルドウイークの皮膚は柔らかくに見えてその実、生半可な鎧など比べ物にならぬ強靱さを誇っている。その皮膚は、狩人の武器でなくては到底傷つけられる物では無い。故に、そこに突き立てられた肋骨は、余りにも無惨に欠け折れた。それが狩人に小さな驚愕を生み、その驚愕がもう一瞬、さらに小さな隙を生み出す。

『オオッ!』

「ぐあっ!?!」

それを見逃すルドウイークではない。振り上げられたままの月光、それを掴むのとは逆の人の形を失った片腕。その裏拳をもろに受け

狩人は弾き飛ばされた。獣の膂力から繰り出されたそれは、生半なまなかな者では上半身を血煙に変えられていてもおかしくない程の一撃であったが、今まで多くの敵を狩り屠った強靱なる狩人の肉体はそれに耐え抜く。だがその衝撃までは到底殺す事は出来ず、狩人は盛大な音を立てて死体の山の中へと叩き込まれた。

「狩人！ くそっ——」

『ハアッ！』

その様を見て、すぐさま狩人を救出せんと駆けるヴァルトール。その眼前を光の刃が通り過ぎて炸裂した。寸での所でバネ仕掛けの如く跳ね飛びその余波を回避したヴァルトールに、まさしく押し寄せる波の如く光波の嵐が襲い掛かる。

「おおおおおおおっ?!?!」

先程とは真逆の方向へとひた走るヴァルトールの背後を凝縮された光の斬撃が断ち割り、着弾し解放され炸裂してゆく。その攻勢を前に狩人を救出する余裕など微塵も無い。ヴァルトールはごく僅かとも言える光波の間隙を潜り抜け、身を反らし、時に滑り込んで必死にルドウイークから離れてゆく。

ルドウイークはその姿を見つめると眼を細めた。侮蔑ではない。純粹に、その姿に機を見出したただけだ。如何に狩人らが常軌を逸した脚力を備えていようと、これだけの距離を取りさえすれば奇襲の危険は大幅に減じる。

故に、ルドウイークはヴァルトールへの追撃を止めると狩人が埋没した死体の山へと向き直り、高々と月光を掲げた。

「奴め、何を……」

死体の小山の陰で、ヴァルトールがそう呟いた次瞬。月光から一度波動が放たれ、周囲の血溜りを噴き散らした。その余波たる血しぶきを浴びながらヴァルトールは戦慄する。散らされ生まれた間隙に、再び押し寄せるようにして血が流れて込んで行く様と重ね合わせるが如く、虚空から現れた光の粒子が月光へと収束し、凝縮され、その輝きを凄絶な物へと増して行った。

それはルドウイークが、既に傷ついたその体で放つことの出来る最

大の攻撃だった。それをヴァルトールも一目で見て取り、狩人を死体の山ごと消し飛ばさんとするその意図を一瞬で読み取って飛び出した。……しかし、距離が遠い。ルドウイークが万全の態勢でその一撃を放つのに必要な距離、それはヴァルトールは、自身の脚で以って稼いでしまっていた。

「狩人!!」

ヴァルトールが駆ける。回転ノコギリを燃やしたまま稼働させ、ルドウイークの一撃を阻むために。だがそれには余りにも彼我の距離は離れており、それをルドウイークも、そしてヴァルトールも理解していた。

しかしそれはヴァルトールの足を止める理由にはならぬ。彼はへ連盟の長として、同様にへ連盟に誓いを立てた狩人の助力となる義がある。そう定義していたが故に、呼びかけに応じてこの場に馳せ参じ、此度の狩りへと赴いたのだ。

だが、そんな彼の奔走虚しく。ルドウイークの掲げた月光が、目も眩むような輝きを持って振り下ろされた。

凄まじい密度の光が、ルドウイークの前方を扇状に薙ぎ払う。それは『奔流』と呼ぶのもおこがましい、正に『濁流』とも呼ぶべき光の決壊。その光は、ルドウイークの前方に存在した全てを、無慈悲に、平等に、消し飛ばした。

「……………狩人」

絞り出すように、立ち止まったヴァルトールが呟く。その眼前には破壊しつくされ散り散りとなる死体と、荒れ狂う海の如く血が逆巻く光景、そして月光を振り下ろしたままの姿勢で硬直するルドウイークの姿。

次の瞬間、ルドウイークに向け再度ヴァルトールは駆け出した。狩人が、連盟の友が死んだ。その事への嘆きもある、憤りもある。だがそれは狩りの場に置いて何の意味も成さぬ。我らは狩人であり、故に成すべき事は狩りに他ならぬ。本来であればすぐさま涙を流し、弔いの言葉を述べたい所であった。だがこの強敵の前では、そのような事が許されるはずも無い。狩りの場で悲しみに溺れた者は、狩りに溺れ

る者よりも早く息絶える。それは狩人の鉄則だ。

故に。本当に散って行つた者の事を思うのならば、遺志を継げ。成すべき事を成し遂げろ。

「おおおおおっ!!!」

ヴァルトールは、未だ火に包まれた回転ノコギリの機構を起動させ異音と火花を散らしながらルドウイクに迫る。その気迫に反応したルドウイクが大技の反動に疲弊する満身創痕の肉体を強いてヴァルトールへと対応せんとその首を巡らせた。

視線がかち合う。その場にあつて二人は狩る者と狩られる者の関係には無く、互いに狩る者である事を直感的に理解した。そしてその関係が容易く狩る者と狩られる者の関係に戻るものであると云う事も、二人は経験上理解していた。なればこそ、二人は眼前の相手を狩るためにその殺意を集中させる。ヴァルトールは耳を劈く異音を撒き散らす回転ノコギリを振り被り、ルドウイクは月光を輝かせ自身の眼前に振りかざす。

そのルドウイクの懐で、血溜まりの底からざばりと音を立てて人影が立ち上がった。

『!?』

驚愕するルドウイク。しかしその驚愕を素知らぬとばかりに腕は人影——狩人へと月光を振り下ろす。それは正しく、英雄と呼ばれるに相応しき反応速度。だがその速度は、掲げ持ったノコギリ鉋を狩人が振るうのを阻むには余りにも遅すぎる速度だった。

狩人が身を屈めるようにノコギリを振り下ろし、その刃でもってルドウイクの右脛を裂き千切る。そのまま狩人は体勢を崩したルドウイクの月光をその姿勢でやり過ごして、踏み込みつつ返す刀で右へとノコギリを振るい、その力を利用して鉋へと転じたその刃で、ルドウイクの左腿を断ち割った。

『グオオオツ………い!』

両前足を破壊されたルドウイクが、苦悶の声を上げ膝を着く。瞬間、既に狩人は一步の跳躍でその懐へと入り込んでいた。

血に塗れたまみ弓を引き絞るか如く右腕を引き、狩人は狙いを定め

る。だが、血溜まりの中に潜んでいた際に過剰に血を取り込んだ故か、その眼は血走り、息も荒く体も己の獣性に震えている。しかし狩人は強靱なる意志でそれを抑え込み、この一撃を致命のそれへと成すに相応しい精度で放つために全精力を注ぎ込んだ。

『オオッ!』

その集中の隙をルドウイークは見逃さぬ。満身創痕の肉体に鞭打ち、無理矢理に戻した月光で狩人の頭蓋を打ち砕かんと狙いを定め、振り下ろす。自身を律するのに手一杯の狩人は回避する事は愚か、反応する事さえ出来はしない。

ルドウイークは、そこで泥の様に遅延した時間を体感する。

右手を引き絞る狩人の表情からは、余りにも深い〈酔い〉とそれさえも律する強靱過ぎる理性の闘ぎ合いが見て取れた。

それは、幾度と無くルドウイークが後進の狩人達に見出したものだ。多くの狩人が夜の内に酔いに溺れ、その身を狩人から獣に墜とし、また狩人達により狩り滅ぼされ、その狩人達がまた酔い、獣に墜ちる。そんな彼らを、自身や当時の〈狩人狩り〉が滅ぼした無限の悪夢。

今ここで行われている狩りも、結局はその焼き直しなのだろう。だが、ここでこの狩人達を殺して、自身はこれから如何なる道を歩むのだろうか。もしや、今この戦いこそが、自身が人間性を保ったまま終われる最後のチャンスではないのか？

………そうなのかもしれぬ。だが。だがしかし。この悪夢の正体を、〈彼女〉がああまでして守る秘密を——私は暴けなかった。故に、許せ後世の狩人。私も、じきに其方へ行く。責めはそこで聞こう。そう、一瞬にも満たぬ感慨がルドウイークの脳を駆け抜けた瞬間。

その肩に、悍ましき異形のノコギリが突き立てられた。

『ガアアッ?!』

突き立てられたノコギリが回転し、その肩の肉を、腱を、骨を、派手に撒き散らし、抉り取った。力を失った月光の刃が狩人の真横に振り落とされ、小さな炸裂で血を吹き飛ばすが、極度の集中に入った狩

人はそれを一瞥もしない。その姿を見て、咄嗟に回り込んでルドウイークの背を駆け登り肩にノコギリを叩きつけたヴァルトールは叫んだ。

「狩人、やれえ!!」

その声に呼応するように、狩人の右腕が正しく獣じみた異形と化しルドウイークの腹へと突き込まれた。そして、そのはらわたを探るように僅かに蠢かせ、次の瞬間臓物を引き千切りながら腕を引き抜き、同時に右肩でルドウイークを突き飛ばした。

その破壊力にルドウイークの巨体が大きく仰け反り、右腕の月光を取り落とす。そして、一瞬、時間が止まったかのような斥力と重力の拮抗を見せた後、頭を垂れるように狩人の眼前へと崩れ落ちた。

『ガアアツ……い!』

轟音と共に倒れ伏し、苦悶の声を上げるルドウイーク。その眼前に、肩で息をしながら狩人が歩み寄る。その姿を見て、ルドウイークは最後の意地とばかりに、右手を伸ばし、触れた月光の柄を掴んだ。だが、そこまでだった。狩人が手に持つノコギリ鉋を己が夢へと仕舞い込んだ代わりに取り出し、大きく掲げ持ったそれを見た瞬間。ルドウイークの戦いは終わり、狩りは決した。

『……それは、ゲールマン翁の……』

狩人が手にしたそれは、巨大な大鎌。〈葬送の刃〉と名付けられし、〈最初の狩人〉の得物にしてあらゆる狩り道具のマスターピース。嘗てそれが振るわれる瞬間を、幾度となく目にした記憶がルドウイークの脳裏に過ぎる。

最初の狩人は、狩りを常に弔いであると考えていた。人を失い、獣と化してしまった者達への、厳粛なる儀式。故に彼はどれほどの高揚を味わおうとも、常に静かに、慈悲深く獣を狩り続けた。獣と化した友を狩り姿を消すまで、最後まで彼は慈悲深き葬送者であり続けた。それはきつと、獣に堕ちた者達がせめて安らかに眠り、二度と辛い悪夢に目覚めぬように——そう言った思いを彼が持っているのだと、かつてルドウイークは考えていた。

故に、ルドウイークは自身のすべき事を理解してしまっていた。も

はや、自分はここで狩られる以外に無いのだと。獣の如き抵抗を見せるよりも、人としてこの刃を受け入れるべきなのだ。

……そこで、ルドウイークに疑問が過ぎる。この狩人は、一体いかにして失われたはずの葬送の刃を手にしたのか。どのような思いでその刃を自身を狩る得物に選んだのか。単純にその殺傷力か、あるいは何がしかの想いを持ってこの場に持ち込んだのか。その疑問故にルドウイークは僅かに首を持ち上げ、狩人の瞳を、自身を終わらせる者の想いを汲み取ろうとする。

そうして見上げた〈最後の狩人〉は、先程見せた獣性が嘘の様に敵意も無く、害意も無く、ただ淡々と、穏やかささえ湛えた瞳でルドウイークを見下ろして、厳粛な声色で言った。

「眠るがいい、英雄。その眠りに二度と悪夢が訪れぬ事を、この私が保障する」

「……………そうか」

その言葉に、ルドウイークはその瞳を受け入れるか如くに静かに閉じた。そして、しばしの静寂の後、その首を三日月の如き慈悲深き刃が断ち落とす。

そうして、ここに〈聖剣のルドウイーク〉は狩猟<sup>HUNTED</sup>され、地下死体溜りでの狩りは幕を閉じるのだった。

〈◎〉

「……………今度こそ、本当に、終わったかね？」

訝<sup>いぶか</sup>しむような声色で、警戒するような足取りで、ルドウイークを突き飛ばした際に放り出されたヴァルトールが狩人の前に戻ってきた。血溜まりにでも落ちたか、あるいはこの戦いで負った傷の多さか、青く染められていた官憲の服は見るも無残な朱色に変じている。

「ああ」

その姿を気にも留めず、狩人は短く呟いた。その眼は彼らが狩りを繰り返していった場所を少し上った所に現れた夢への灯りへと向けら

れている。釣られるようにそちらに目を向けたヴァルトールはしかし灯りを認識できず、代わりに疲れ切ったような溜息を吐いて、思い立ったかのように狩人に問いを投げた。

「……なあ、狩人。一体、あの光の濁流からどうやって生き延びた？

あの死体の山を丸ごと消し飛ばすような技だぞ？ 何か特別なカラクリでも——」

「無い。ただ、私があそこに居なかっただけだ」

「何？」

その眼をますます訝しむように顰めるヴァルトールに、狩人はうんざりとした、考えたくもないと云ったような顔をする。だが、その内ヴァルトールの興味に根負けしたか、渋々と云った様子で狩人はその状況について語り始めた。

「……………単純な話だ。私はルドウィークに殴り飛ばされて死体の山に突っ込んだが、随分奥まで突っ込まれたのでな。そのまま死体の中をかき分けて抜け出していただけだ。中途半端な深さに叩き込まれたのであれば、奴も私に気づいていただろう」

「成程。その後、血の中を泳いで逃れた上で機を伺ってたのか……………何と云うか、天晴あっぱれと云うべきか、執念深いと云うべきか、言葉に迷うな……………」

「止めてくれ。あれはまるで、〈血舐め〉にでもなった気分だ。勢い良く忘れたい」

「ハハハ、君もそう云う顔が出来るのだな！ 中々に愉快だぞ」

「止めてくれ……………」

「ハハハ……………」

勘弁してくれ、と云った具合の狩人をひとしきり笑った後、ヴァルトールはコキコキと首を鳴らしてバケツ兜のずれを調整すると、狩人に背を向けた。狩りは終わった、故に別れの時間が来ただけだ。

「では私は行くよ。話す事は大体、先程話してしまっていたしな」

「そうか。また必要な時はよろしく頼む」

「ああ、ああ。こちらこそだ。ではな狩人、また会おう」

「それでは、また」



ヴァルトールは最後に一度振り向いて〈連盟〉の証たる杖を高く掲げる。そしてそれを腰に下げると足早に外へと消えて行った。

それを見送り残された狩人は、一度足元に目を向け何かを踏み潰すような仕草を見せた後、踵を返して灯りへと向かう。……だが、その途中で足を止め、死体溜りの隅に転がるその前に立ち、小さく呟いた。

「……ルドウイーク」

狩人の前には、首だけとなり、しかしまだ息を続ける獣の頭部が転がっている。それに向けた狩人の言葉に、ルドウイークは血に塗れ殆ど見えていないであろう目を向けて、か細い声で問いかけた。

「……教会の狩人よ、教えてくれ。君たちは、光を見ているかね？」

私がかつて願ったように、君たちこそ、教会の名誉ある剣なかね？」  
狩人はその質問になんと答えるべきか逡巡した。そも、狩人は〈教会〉と関係を持っていた狩人では無く、ヤーナムで目覚める以前の記憶も無い彷徨いであった。そして〈教会〉にもはや名誉など無く、ヤーナムの悪夢たる〈獣狩りの夜〉、その一端に関わっている存在であるという嫌悪感しか持ち得ていなかった。

「……そうだ」

だが最早、目の前の相手すら正しく見定められぬほど衰弱したルドウイークを前に、先ほどの『保証』を覆すまいと気を遣う程度には、狩人には人間性が残されていた。

「おお、そうか……それは、よかった……。嘲りと罵倒、それでも私は成し得たのだな。ありがとう。これでゆつくりと眠れる。暗い夜に、しかし確かに、月光を見たのだと……」

それを聞いて、狩人の欺瞞に気づいた様子も無く、穏やかにルドウイークは目を閉じた。

「スヒーツ、スヒーツ……」

安らかな寝息を立てるルドウイークを暫く見下ろしていた狩人だったが、突然何かを思い立ったように彼の傍に突き立っていた月光の聖剣を引き抜くと、崩れ落ちた獣の体へと向かってゆく。

「あんた、どうするつもりだ？」

その背に声がかげられた。この悪夢の中で、幾度か言葉を交わした〈やつしの男〉。いつの間にやら死体溜りに現れていた彼に、しかし狩人は何も答えない。狩人はそのまま獣の体に纏われた檻樓、嘗て狩装束であったそれから教会の象徴たる聖布を剥ぎ取ると、寝息を立てるルドウイークの首の上に被せ、そこに躊躇なく月光を墓標じみて突き刺した。

「……………」

その様を無言で見守るやつしの男の前でルドウイークに対し月光の刃を深々と押し込んだ狩人は、もはや何をも語る事の無くなった英雄の墓標に一度狩人の礼を向ける。そして、懐から取り出したる古ぼけたオルゴールを開いた。

しばし、その陰鬱な音色に死体溜りが満たされる。そうして、オルゴールの奏でる音が止まるまでの間、二人はまるで、その音色に聞き入るように沈黙していた。

〈◎〉

「……………何故、あのような真似を？」

オルゴールの音が止んで初めてやつしの男が口を開く。その声色は狩人を問い詰める様な響きであったが、その実、狩人を試すような響きが半分ほど含まれていた。

「アンタにだってアレは扱えるはずだ。それに、あれ程の武器を英雄に託されたなら、この悪夢を暴くために使うのが筋つてもんじゃないのかい？」

「月光は、英雄が携えるべきものだ。私の様な者が持つべきものではない。それに、月明かりの元ならば、少しはマシな夢を見るだろう」  
ルドウイークの亡骸を見下ろして穏やかに云う狩人に、やつしの男は頭痛でも堪える様に額の前に手をやった。

「……………ハッ。獣狩りの夜の有り様を見てそう云えるとは。気でも狂ってるんじゃないのかね？」

「同感だ」

それに自虐を以って応じると、狩人は帯びたノコギリ鉋にこびりついた血を狩装束の袖で拭い、最低限の手入れを行う。そして首だけを巡らせてやつしの男の目を一度見据えると、どこか遠い目をして肩を竦めた。

「それに私がやらずとも、貴公がやっていたらろう」

「——まあな」

狩人の言葉を否定せず、ルドウィークの元へと歩み寄り小さく狩人の礼を見せるやつしの男。そこに狩人は彼とルドウィークの間の知己を何となく見出し、しかしそれに触れる事も無く、灯りへと歩み寄り指を鳴らして火を灯した。

「さて、狩人。あんた、これからどうするんだ？」

「奥へと進む。まずは時計塔へ。これがあれば踏み入れるのだろうか？」

やつしの問いに、狩人は懐から瞳の意匠を施されたペンダントを取り出す。それを見て、やつしは先ほどと同様に額の前に手をやって頷いた。

「ああ。ならば、その入り口までは同行させてくれ。そのペンダントが無きや、どっちにしろあそこまでは行けないからな」

「構わない。しかし、道中が安全とは限らないが」

「ああ、云って無かったか。俺も狩人で、ここは悪夢。そんな事は承知の上さ」

言ってやつしは背の曲剣を抜きくるくると曲芸じみて弄んだ。狩人は一瞬、その武器に興味深そうな目を向けた。が、すぐに気が変わったように目を逸らし、死体溜りの奥側にある階段を登って奥へと続く通路を見出す。

「気をつけろよ。この先は何が出るか保証できない。恐らく、悪夢に呑まれた同業達も控えているだろうしな」

「ああ……」

やつしの忠告、そして〈瞳〉の超思索によってこの先に待ち受ける困難を予見した狩人は忌まわし気に返事を返した。そして通路の前に辿り着いた狩人は一度首を巡らせ、二度と悪夢に目覚めることの無

い英雄の亡骸を一瞥して目に焼きつけると、すぐに意識を切り替え、  
先の見えぬ時計塔への通路へと歩みを進めるのだった。

## 漁村

### 呪いの果て

ぐじゅり、と音を立てる泥を踏みしめる。

薄暗い灰空の元、色褪せた景色の中を行く。

嘗て、〈ベルゲンワース〉により蹂躪され、秘匿された、呪いの深層。ただ、〈漁村〉とだけ呼ばれるその場所の。最も果てへと、〈狩人〉は目前に迫っていた。

数多の狩りがあつた。

〈悪夢〉に沈んだ古狩人達。

呪われ果てた、〈醜い獣〉。

或いは、最後の瞬間まで垣間見た導きに殉じた、〈聖剣の英雄〉。

〈教会〉の探索によって積み上げられた、哀れな被術者たちの怨嗟の叫び。

それと共にあることを選んだ、時計塔の女狩人。

現実においてもはや失われたはずの〈初代教区長〉。

呪い、あるいは祝福により成り果てた、嘗ての漁村の住人達。

鳴らぬ鐘の音と共に襲い来る、秘匿を守る〈獣皮の狩人〉。

その全てを狩り殺した。

例外なく、加減なく、容赦なく。だが、人としての一線を越えることなく。手にした仕掛け武器と狩り道具。身に着けた力と技でもって、立ちほだかる全てを切り抜けてきた。その中で、幾度となく因果に打ち据えられ、救えたかもしれないものを殺し、嘗ては日常の営みに生きていたはずの者たちを狩り、この悪夢にて出会った、身をやつした同行者をも失い。それでもここまで、辿り着いた。

悪夢の果て、全ての始点、〈瞳〉を巡る、その始まりに。

歩みゆく。もはや異形と化した漁村の住人達、一心不乱に祈りを捧げる彼ら彼女らの間を、限らない無関心で以てすり抜けて行く。誰も、その者を気にも留めない。この地における例<sup>イレギュラー</sup>外を、咎めることは無い。

それは、その者がそこに至る資格を持ち得ていたが故か。どうあがこうと止めようがない者であると直感したが故か。あるいは疾うに人を超え、半ば彼らの信奉するものの同類と化していたからか。

呻きめいた祈りを上げるばかりの彼らが、それについて語る事は無い。その者もまた、問いかけることも無い。互いに視線を向け合うことも無く、片や歩みを止めず、片や祈りを続けて行く。

視界が開ける。

見上げた空にはステンドグラスめいた巨大な輝きが、雲の向こうに揺らめき浮かぶ。海には数多の船の残骸。突き出した帆を失ったマストは、まるで立ち並ぶ墓標のよう。左右を崖に囲まれた海岸に打ち寄せる波は、まるで風の如くに穏やかであり。

その波打ち際に、横たわる上位者の亡骸に寄り添うように、それは佇んでいた。

二腕二脚の四肢を持ちながら、人のそれを遥かに超えた長身。首からは魚の鱗のような、或いは首に巻いたストールじみた半透明の器官を持ち、青白い肌を晒した痩せさらばえた体は、朽ち果てた白樺の如き脆弱しさ。その人に似た顔はしかし老い果て、〈獣〉のような暴力的な生命力も感じず、今まで相対した狩人たちのような、殺意や使命感や狂気のような意志も感じない。

ただ、違和だけがあった。あるべきでない所にあるという違和。それを可能としてしまう、あらゆるものとしての存在格。

〈ゴース〉、あるいは〈ゴスム〉と呼ばれた上位者が遺したる、老いたる赤子。秘匿されし果てに立ち尽くす、悪夢の心臓、〈ゴースの遺子〉。

その、悪夢の極点を前にして、狩人は一步一步歩を進める。

ヤーナムの狩人にありふれた、狩人の狩装束。右手にはノコギリと鉋の使い分けを可能にする仕掛け武器、へノコギリ鉋。左手には獣と対するための、へ獣狩りの散弾銃。かつてより数多の狩人が纏った装いで、ただ唯一この場へとたどり着いた者。その者は、自身に背を向け立ち尽くすへ遺子へ向けまっすぐと——迫る事は無く、横たわる巨大な白い亡骸を挟んだ向かい側へと辿り着いて、寄せては返す静寂が靴の爪先に染みるのも構わず、へ遺子と同じように空のステンドグラスじみた、あるいは砕けた窓から差し込んだ太陽のような輝きを見据えて、目を細めた。

「……………ようやくだ」

暫くの沈黙の後、へ狩人へはほつりとつぶやいた。

「ようやく、また辿り着いた。旅の果て、君を送り届け辿り着いたのも、この景色だったか」

へ遺子へは答えず、ただ立ち尽くす。

「悪夢の終わりをどれほど願ったのか。そうであったであろうあの日の私に、資格はなかった。ひとたび全てを失い、ふたたび夢に目覚め、そしてまた多くを奪われた果てにそれを得ることが出来たというのは、不思議な話だが」

へ狩人へは答えを求めることのないまま言い終えて、一人身勝手に小さく笑った。そもそもそれは、傍に立つへ遺子へに向けられたものだったのか。あるいは横たわるへゴースの亡骸か。もしくは、ここにはいない誰かか。

……答える者は無い。狩人はそのうち笑い終えて、波打ち際に沈む、朽ち果てた小舟に視線をやる。

「遠かった。遠い、遠い道のりだった。夜空の星のように尊いものはあったが、夜空のように光無き、呪われた道行きだった」

感慨深そうに、目をさらに細める狩人。青白いその瞳は僅かに蕩けていたが、神秘を映す確固たるものであり、それでありながら未だに人の瞳であった。

「地底のへファウナへは月明かりに斃れた。空にあるへフロラへは私がやる。海にある君が成すべきことは、もう何も無い」

遺子が呻きを発した。まるで、病人たちが泥の中を歩いてゆくかのような呻きだった。それを耳にすると、狩人は鼻までを覆っていた口布に指をかけて顎下まで下ろし、その顔を外気にさらす。そして、**人**という人種らしからぬ、ひたすらに穏やかで、朗らかな笑みを見せた。

「死が、眠りが、怖いかね？　だが、悪い夢を見るとは限らないし……悪夢というのは……もしかしたら、私や君の顔ほど、恐ろしくは無いのかもしれないぞ？」

悪夢の果てにいても拘らず、狩人は何が面白いのか、ふふと肩を揺らして笑う。遺子は無反応だったが、その人知を超えたはずの瞳はまるで小さな少年のように僅かに揺らいだ。

「……ああ、すまないね、このような話を。今日は、いつにもなく饒舌だ。何故だろうな。久しい友人と顔を合わせれば、人はこうなるものなのか」

一人納得したようにつぶやいて狩人は口布を鼻上へと戻し、腰に吊るしていたノコギリ鉋をつかみ取った。そして踵を返し、立ち続ける遺子に背を向け波打ち際から離れて行く。

五歩、十歩、十五歩、二十歩。それだけ歩いて、狩人は再び振り向いた。

遺子もまたいつの間にか振り返り、その右手に、胎盤じみた異形の肉の得物を握り締めていた。

「……………」

もはや、言葉は無かった。狩人も遺子も、示し合わせたかのように向かい合い、歩を進める。真つ直ぐに背を伸ばした自然体の狩人。対する遺子は不自然に前掲の姿勢で、右手は手にした肉の得物の重みに引っ張られるように垂れ下がっている。

その姿は似ても似つかぬものだった。ただ一つ、手にした武器の形状ばかりはどことなく似てはいたが、それ以外、何一つとして共通点を見出せぬ立ち姿であった。

一歩一歩近づく彼我の距離。狩人が手にした、散弾銃の届く距離。それは得てして、数多の獣にとって死線の内側であった。爪も、牙も、



その跳躍によって相手を捉えうる距離。そう判断して飛び出すような生半な獣であれば、銃に迎撃され、瞬く間にその臓腑を引きずり出される。そういう距離が射程になるよう、獣狩りの銃器は作られている。だが、相手は獣で無く。また、獣に堕ちた人でもなく。

故に先手を取ったのは、狩人だった。

一步。今までのそれと同様の、軽々しい一步、だが、まるで数秒閉じていた眼を開いた後に映る光景のように狩人の立ち位置はその五歩分に相当する距離を移動しており、遺子がそれを認識した時は既に狩人は手にしたノコギリ鉋を振り上げていた。

——余りの攻撃速度に、空気が引きちぎられ悲鳴を上げた。空気が、悲鳴を上げた。

狩人は目を見開いた。遺子の姿は、自身の射程圏内になく。空を遺子が揺蕩う。左手で右手の臓腑武装から肉の一部を引きちぎり、それを頭上に掲げている。

直後、空から放り投げられた肉塊と、地面に着弾したそれが巻き起こした炸裂を回避できたのは、ひとえに狩人の技量の高さと脳に宿した瞳の力によるものであった。

背後に跳ね散った土と水と肉の飛沫を背に浴びながら狩人は降り立つ遺子の姿だけを冷徹に捉え、その着地際に合わせて今度は腰を落として跳ね飛ぶ。先の不意を打つような静かな跳躍ではない。一瞬の隙を穿つための最高最速の一步。

しかしそれは遺子の投擲した臓腑武装によって阻まれる。その細腕からは考えられぬ常軌を逸した威力。狩人は即座にそれを、武装から伸びたへその緒じみた伸縮自在の紐を利用した遠心力による威力加算であることを看破する。だが。看破したところでこの一撃の流れは変わらない。地面を打ち砕く威力のそれを狩人は急停止からの後方跳躍を間断なく行い凌ぐが、着地した遺子は叫びと共に突進、同時に紐を引き戻して武装を回収。勢いそのままに狩人へと襲い掛かる。

だが、狩人はその猛撃に真っ向から戦いを挑んだ。遠心力の利用はそちらの専売特許ではないと言わんばかりに、跳躍の着地を貯めへと

転じてのバネじみた前進から振り抜かれたノコギリ鉋は主に呼応し展開、武器の重心の変化と遠心力の増大によって、振り下ろされた臓腑武装を弾き返して隙を生む。

何たる狩人の極致たる圧倒的身体能力と戦闘技術に極限まで強化された武器の性能を重ね合わせた絶技か。並の狩人が同様の行為を行つたところで、上位者たる遺子の身体能力から生み出された攻撃力に押し負けて血と肉の塊へと変じるのが関の山だろう。

しかしこの狩人はそのような常識とは無縁だ。聖剣の英雄を、血刃の女狩人を、煮えたぎる炎の獣を下し、この悪夢の深奥へと踏み込んだこの狩人は、既に狩人史上における極限たる領域へと自らの狩りの技を研ぎ澄ませていた。

一步、二歩、三歩。姿勢を崩した遺子の懐に一步、即座に振り下ろされた左拳を避けるよう、その左脇をすり抜ける二歩。更に、振り向きながら回転を乗せ、威力を底上げしたノコギリ鉋を裏拳めいて振り抜くための三歩。

鉋の切っ先が、霞み消えるほどの速度。それにしかし遺子は食らいついた。拳を振り下ろした勢いそのままに体を沈め、右肩のみを上げるようにした体勢から、後方へと無視認のまま臓腑武装を振るう。再びの激突。肉と鉄がぶつかり合い、理不尽にも火花が散る。人間を超えた反応速度で動く遺子の対応に狩人は眉間に皺を寄せ、急くように後方へと跳躍した。

その様な逃げの手を遺子は許さない。臓腑を振りぬいた勢いで体を振り下半身を無理に滑らせて狩人へと向き直ると即座に突進の構えに移る。鋭さと速度によって、あらゆる攻撃を掻い潜るヤナム狩人の跳躍。だがそれは跳躍であるが故に、着地際に隙が生まれるものだ。

この狩人のそれは、他の狩人のそれに比べ遙かに隙の小さいものである。だが、それが跳躍である限り——狩人自身が、狩人の技という様式美に心を砕いている限り——どうしようもなく、その隙は生まれてしまうものなのだ。

そしてそれはや、それは不可避の状況と言えた。数秒後には、暴走し

た馬車めいた恐るべき速度で迫った遺子によって、真つ二つになるか原形すら留めぬ肉の塊となるかという状況。既に、打つ手はない。

既に、手は打たれていた。

遺子の足元が音を立てて爆発した。予想外の場所から吹き上がった熱と炎、その衝撃に一瞬遺子が怯みのけ反る。その視界を、からくり仕掛けの部品の破片が勢いよく横切つてゆく。

時限爆発瓶。現在には形残さぬ一会派、〈オト工房〉の手になる特殊な狩り道具。地面に突き刺したそれは内部の機構によって、定めた時間の経過によつて起爆する。使い辛さと、複雑な機構を使い捨てる余りの非効率性に多くの狩人には受け入れられなかつた品だ。搦め手を好むごく一部の革新的な、斬新な、物好きばかりに好まれた。そうした者たちが、後の〈火薬庫〉に繋がつたのであろうが。

そのような事情など知らぬ遺子には、炎はただ視界を遮る邪魔者でしかなかつた。叫びと共に臓腑を振るい、炎を消し飛ばさんとする。

だが、炎の壁を狩人が躊躇なく突破してきたことで、その判断は誤りとなつた。

横薙ぎに振るわれた臓腑を掻い潜りノコギリへと戻つた刃が振るわれる。横に引かれた一撃は、間違いなく遺子の凹んだ腹に叩き込まれ、肉の断片と共に赤ではない色の血をまき散らす。

痛みにか、怒りにか咆哮する遺子。狩人は追撃しなかつた。即座に後方へと跳躍したその眼前を、切り返した臓腑武装が過ぎり過ぎる。あと僅かに退避が遅れていけば、狩人は死んでいただろう。

そのままの勢いで狩人はもう一度後ろへと飛びのいた。その眼前を振り抜かれた臓腑武装が過ぎり過ぎた。遺子の立ち位置は変わっていない。その手から離れた臓腑武装をそこから繋がっているへその緒の紐で以つて円を描くように薙ぎ払つたのだ。もしも狩人が隙を突こうと前に跳躍していれば、伸びた紐に引っかかりそれを起点として死を迎えていただろう。

狩人が着地する。遺子は動かない。手元に戻した臓腑の肉を、その

左手でつかみ取る。狩人は眉間に皺を寄せた。先ほど同様の投擲か？　しかしその予想に反して、遺子は握りしめた肉を自身の足元に叩きつけた。

爆発。狩人の足元が肉色の輝きを帯びたかと思えば、突如として炸裂を起こしたのだ。

その衝撃に傷を負い吹き飛ばされ、地面に叩きつけられ転がる狩人。超思索に至りながら未だ人の原形を保ったままのその思考は、今の攻撃についての推理を止まったような速度の主観時間の中で繰り広げる。

神秘か。狩人の用いた時限爆破瓶から、今の技を思いついたのか。或いはそもそも身に着けた能力なのか。その判断を下すには、証拠が足りぬ。狩人はそう結論付けると即座に次の思考に――

――止まっていたはずの時間の中を遺子が駆け抜けた。叫びと共に獣じみて両腕を足に見立てた疑似四足歩行で突撃するその行動は先ほどから変わらず、一見無知なる獣のようであったが、それが有効だからそうしているのだと、狩人も既に理解していた。

態勢を立て直す。転がっていた狩人はすぐさま起き上がると右手のノコギリ鉋を構える。しかしその意識は、左手に握られた散弾銃へと張り巡らされていた。

遺子が迫る。再び世界が鈍化する。人でも獣でもない、白い眼球。その青ざめた顔は死の迫る老人のようでありながら、赤子の如き生の躍動を吠え散らす。まるで犬のように両手両足を十全に使って迫る速度は、あらゆる獣のそれを凌駕していた。狩人は迎撃を判断する。今まで獣にそうしてきたように、銃弾を叩きこみ、怯ませ、臓腑を抉りぬく。それを意識する。狙うのはただ一瞬。手にした臓腑武装をこの肉体に叩きつける、その一瞬。狩人は迫る遺子の手へと極度の集中を向けた。

空いていた。遺子の両手は空いていた。そこに臓腑武装は無く。狩人の顔が驚愕に動く。遺子の手首から、肉色の紐が空に向けて伸びている。上方。刃となった側をこちらに向けた臓腑武装が、弧を描いて落ちてくる。

武具の特性を生かした、単独での時間差攻撃。暴力的な身体能力はまるで獣のようでありながら、熟練の狩人じみたその技巧。そして、身に宿す強大無比なる神秘。上位者としての超思索、超反応。

まるで、自身の先達のようなだと、成りかけの狩人は肩口に食い込む刃を眺めながら他人事のように考えた。

地面に叩きつけられた臓腑武装によつてまき散らされた潮水と泥が大きく巻き上がる。その中から飛び出す狩人。左腕は散弾銃もろともに体を離れ、真っ赤な血を——未だ狩人が人であるという証拠を、色褪せた波打ち際に撒き散らす。狩人は右手で左肩を抑えながらに逃げ伸びんとしながら、痛みに僅かに呻く。それを頼りに、泥の飛沫の中から遺子が襲い掛かる。

退避、退避、退避。三度の跳躍に、しかし遺子が追いつき再び臓腑武装を縦に振るう。狩人はさらに一步跳躍し、その間合いから身を引いた。否。手元を離れた臓腑武装は、肉の紐によつて得た遠心力で今度は狩人の頭蓋を砕かんと降り注ぐ。まるで、罪人への最後の慈悲たるギロチンめいて。迫る死、迫る遺子、失われた左腕、失われた散弾銃。もはや、退いても未来は無い。

だからこそ、狩人は前へと踏み込んだ。ノコギリ鉋が宙を舞う。真上に向け放つたのだ、別の得物を手にするために。

銃声。放たれた単発の弾丸が、前傾姿勢の遺子の顔面を強かに打ち据え、弾けた水銀の威力はその姿勢を大きく崩した。

その右手に握るは流麗なる剣。ヘレイテルパラツシュ。大型の騎士剣。ヘカインハーストの騎士に伝わる一振り。だがそれは当然、ただの剣ではない。変形した得物は剣としての機能を保ったまま、迫り出した銃口から硝煙をゆらゆらと燻らせている。

それをまた、狩人は既に放り捨てていた。地面を転がる騎士銃剣を、狩人の踏み込みにより跳ねた泥が汚す。

右腕を引き絞る。獣の腕を。右腕を衝き込む。上位者の臓腑へと。臓腑を引き抜く。ぶちまけられる青ざめた血。その傷口に骨すら露出した左肩を叩きつけるようにして、狩人はその体軀を吹き飛ばし

た。

先ほどと立場が入れ替わったように、波打ち際を転がる遺子。色褪せた血が、海に溶け込み消えてゆく。対する狩人は、上位者の生き血を再び得て取り戻した左腕を横に振るい、落ちてきたノコギリ鉋をその手に掴んだ。そして、恐るべき速度で前に出る。

狩人はその最中で転がっていた散弾銃を手にとった。そしてそれを腰に吊ると、既に次の得物を手にしている。

それは、先に屠った〈聖剣の狩人〉に由来する得物。扱いやすい銀の剣と、その鞘として扱われる大刃を併せ持つ仕掛け武器。ヘルドウィークの聖剣。〈血晶〉の力により炎の威力を纏ったその切っ先を、強く地面を踏みしめた狩人は遺子の顔面に向けて全力で突き出した。

掲げられた遺子の左掌が込められた炎の威力に燃え上がり、砕け散る。しかしそれによって頭部破壊を免れた遺子は、更に海に向け転がりながら、その顔を狩人へと向け吠えて見せた。

狩人はそれを、波打ち際に佇み受けていた。追うことはしない。海は〈ゴース〉の領域。その遺子たるものを相手にして踏み込むほどの蛮勇を、狩人は持ち合わせてはいなかった。

既に〈聖剣〉は夢へと仕舞われ、狩人の右手にはノコギリ鉋が握られている。左手には散弾銃。多少汚れてはいるものの、未だ放たれておらぬその牙は健在。対する遺子は腹に大きな傷を負い、膝近くまで海に浸らせながら肩を揺らして狩人を睨みつける。

そうしてしばらく、互いに視線を交わしていた。そこには何らかのやり取りがあったかもしれぬ。上位の者にしか理解できぬやり取りが。

だが、沈黙は永遠に続く事は無い。夢がいつか覚めるように。

遺子が咆哮する。狩人は立ち尽くしたまま、それを見つめている。遺子は手にした得物を掲げ持った。大切そうに、愛おしそうに。そしてそれを口元へと運び、食らいついた。

神秘の爆発に、狩人は驚愕に目を見開いた。

衝撃に吹き飛ばされた海水が、その間隙を埋めるように再び押し寄せる。

腹の大傷も、砕け散った左手も治癒した遺子は、その体軀に更なる神秘の力を宿らせて唸りを上げる。首から生やしていた器官は大きく揺らめき、今の遺子が先ほどまでとは『違う』と言う事を狩人の超思索に強く示す。

狩人は嘗て無いほどの緊張感と、それを齎した強敵を前にした狩りの喜びを人の理性で強く律して姿勢を落とした。あらゆる状況を想定し、あらゆる受け手を思索する。上位者たる思考は、その全てに否と返した。銃撃も、投擲も、踏み込みも、神秘も。それを上回る力で押しつぶされる。ならば。

ノコギリ鉋を構える。攻めるしかない。元より、狩人の技とはそういうものだ。彼の周囲で塵が渦を巻く。〈加速〉。後はタイミングの問題だ。遺子の動きに合わせ、一撃を叩き込むのだ。その先は見えぬ。その超思索をもつてしても、海上に揺蕩う霧の如く、見通す事など出来はしない。

遺子も、それはわかっているようであった。全身から神秘の力を発露しながら、無暗に動く事は無い。先の静かなそれとは違う、戦慄するような睨み合いだった。

そして、此度先手を取ったのは遺子であった。何かを呼び寄せるように身をもたげ、咆哮を響き渡らせる。

瞬間暗雲が渦巻き、海岸に雷が降り注いだ。雷光、雷鳴。尋常なる生物であれば思わず身をすくませる衝撃と轟音。だが、向かい合っていた二者の意識には対する相手しか存在せず。海に突き出た船の帆へと再び雷が落ちて爆散したのを合図にして、二体の上位者の赤子は恐るべき威力で踏み込んで正面から激突した。

## 果て無き狩路

In the Myth Gods are Force.  
神話の時代、神とは力であった。

炎然り、雷然り、嵐然り。

ヒトの想像の範疇はんちゆうに収まらぬあらゆる力を、人はいつしか神と呼び、名と形を与え、それを自らの上に置き、敬い、生きる指針とした。そうして、人々は？榮さかしてきた。

時にその力に抗い、或いは従い、多くの場合は打ちひしがれるばかりではあったが、それでも人は神と共に、長きに渡る時を歩んできたのだ。

だが、時を経るにつれ。人々が数を増し、多くの事を学び、自らの足で立つに足る力を得る中で、いつしか神は、その存在格の重みは、文明と言う灯りによって、薄まり忘れ去られていった。

それは、ヤーナムの人々の間でも同様であった。

何ら神を崇める訳でも無き「医療教会」が、この斜陽の街に根深く息づいていたのがその証拠だ。この街において神を奉ずるものはむしろ異端者であり、大多数の人々は自らに目に見える手を差し伸べる医療教会の庇護の元、血と生活を享受してきた。

かつては、ヤーナムにも神を奉ずる習慣があったのだろう。もはや忘れ去られた信仰の存在は、この街に数多に残る石像たちが証明している。だが、それもはや形骸化したものだ。その由来も、自分たちが何を恐れ、畏れていたのか。それが、どこからやってきたのか。語れるものも、知るものも、とうの昔に去っている。

だが、今この瞬間。とうの昔より忘却されることのない、呪いの集積、因果の淀み、悪夢の心臓であるこの漁村にて。人知を超えた力を振りかざし、激突する二体の怪物のことは――



——旧ふるきに則のつとるならば、『神』と呼んでなんら差し支えないだろう。

轟音。閃光。海と地の境目たる砂浜に、天の力たる雷が咆哮の命じに応じて降り注ぐ。

聴覚、視覚を叩き潰す力の炸裂の中を迷いなく走り抜ける影の如き姿は一人の〈狩人〉。照らされる血と泥と海水に濡れたヤーナムの狩装束。縁がほつれた三角帽<sup>トリコーン</sup>。握りしめる鈍く輝くノコギリ鉋。その刃を、目前に迫る異形へと全力で振り下ろす。

異形はそれを手にした臓腑の刃で真つ向から受け止めた。水死体の如き白い肌は枯れた古木の如くにしわがれて命を感じず、だが途方もないまでの力と、底の見えぬほどの呪いを内包する。

獣を上回る身体能力。狩人じみた技巧。自らの領分<sup>海</sup>で無き天の雷すら従える、上位者としての神秘、潜在能力を兼ね備えた存在。

——〈ゴースト〉の遺子。秘匿されし悪夢の心臓。ビルゲンワースの罪の応報。世に残されし、呪いの極点。

それが万感の殺意を以って、一人の狩人へと襲い掛かる。降り注ぐ雨を轢殺<sup>れきさつ</sup>し、泥交じりの砂浜を踏み殺し、今まさに、その命を叩き潰すべく狩人へと迫る。

対して狩人は、何の躊躇も無く前に出た。既に、この上位者に待ちの技は通じぬと、その身で十分味わった。ならばと、相手の攻撃にあえて合わせて、技の冴えで切り結ぶ。

身体能力、神秘。この二点では、及ぶはずも無い。技も、ある意味では自分自身という手札を最大限活用する遺子と、目に見えて差がある訳でもない。

ただ一つ、狩人が勝るものがあるとするならば——

交差する瞬間、狩人は小さく遺子の顔面に向け小包を放った。それを躲そうと遺子が首を動かす前に、手にしたノコギリ鉋を包みへと叩き込む。閃光が散る。アーチボルドの手になる、雷光ヤスリ。それが摩擦によりて弾け、雷を纏わせ、その光によりて遺子の視界を奪う。

ほんのわずかに、ほころびが生まれる。そこに、滑り込む。

—— 経験。生まれ出でたばかりの遺子と、既に何体もの獣を狩り、幾体もの上位者と見え、『三本の三本目』にまで到達し蒙を啓いたこの狩人との間には、今まで戦いから学んだ量には、明確すぎる差があった。

もはや貯めなど感じさせぬほど完成された、狩人の歩法。それを以って、まるですり抜けたかのように狩人は振るわれた臓腑武装を掻い潜り、後の先でもって脇腹を引き裂く。

遺子の悲鳴を置き去りにして、狩人は動き続けた。振り向きざま三本のナイフを投擲し更に横に飛び退きながら散弾銃を発砲。即座に『加速』し、飛び散る水銀弾を壁代わりに距離を詰める。血を流しながら振り向く遺子の側頭部にナイフが命中。しかし咄嗟に頭を振り払った遺子の行動により突き立つことはない。薙ぎ払われる臓腑武装。へその緒が伸縮し、散弾の壁と狩人を一息に消し飛ばさんと迫る。狩人は左手を、夢の中から散弾銃と引き換えに引き出したヘガラシヤの拳を握りしめ、側方から迫る臓腑武装に向けて振るい叩き落とした。

叩き落とされた臓腑武装はしかしその破滅的威力を維持したまま、地面に墜落し泥と砂をぶちまける。しかし狩人はそれを意に介さず、衝突によってぐちゃぐちゃに壊れた拳を遺子の胸へと叩き込んだ。

当然、遺子には通じぬ。枯れ木の様な肉体で、岩盤の様な存在感を以ってその拳を受け止める。その余りの重みに呆れたように狩人が一度息を吐き、臓腑武装が戻る前にと僅かに雷光を残したノコギリ鉋を振るうもそれが届く前に遺子は跳躍。空中で臓腑武装を掴み替え、その刃を下向け急降下。狩人は即座に跳躍し回避。遺子着陸の衝撃によって飛び散る泥水を見据えつつも潰れた左腕で器用に懐の輸血液を取り出すとそれをそのまま握り潰し、直に左手を治療し再び散弾銃の持ち手を握り締めた。

直後、構える暇も無く狩人の足元が肉色に輝く。泥水の向こうでは地面に手を着いた遺子。狩人は再『加速』。即跳躍。炸裂する神秘か

らどうか逃れ、体勢を立て直すべく両の足で泥砂を踏みしめて滑る。そこで、遺子の姿が無い事に気づく。自身の顔に、影がちらつく。

——上！

狩人は視線を向けることも無く、加速の速度を以って全速力で駆け出した。次瞬、狩人のいた地点が突如として血肉交じりの炸裂を生じ、それは駆ける狩人を追うかのように連続で発生する。地面越しの神秘炸裂によって狩人の意識を下へ誘導した遺子の二の手、再跳躍によって上空へ移動してからの連続臓腑投擲。

神秘によつてか、不条理なまでの跳躍時間で滞空した遺子による臓腑の投擲は止まらない。雨の中を、さらなる速度で飛来する臓物は、天より来る流れ星のよう。土に降り注ぎ炸裂する姿など、尺度は小さくとも隕石の衝突の似姿だ。そしてそれは数を重ねるごとに、より正確さを増し狩人に着弾すべく迫る。

だがしかし、狩人は無防備にその着弾を受けることは無い。遂に自身に目掛け降り来った臓腑が着弾するかと思われた刹那、それは呆気なく二つに分たれ、狩人の背後に二つの炸裂を生み出した。

未だに滞空しながらに、驚愕する遺子。その目に映るは駆ける狩人、そしてその周囲を飛び交う刃。降りしきる雨の中で刃の煌めきを閃かせているのは、狩人が振るう得物の一つへ仕込み杖。最も人の様式美に則った狩り道具であり、同時に最も扱いの難しいとされる狩り道具の一つ。あまりにも元となった杖らしさを——つまり、人らしさを——残したが故に獣に対するには殺傷力が小さく、真に熟達した一握りの狩人こそが好み扱った武器。

獲物として並の獣など比較にならぬ、真なる上位者の皮膚を一撃で断ち切ることは出来ずとも、矢継ぎ早に飛来する臓腑の礫を打ち落とすのにこれ以上の武器はあるまい。

そして、史上最も熟達した狩人に等しいかの〈狩人〉がそれを振るえば、それはまさに斬撃の結界となりて臓物どころか降り注ぐ雨すらも斬り散らす。

その光景を目の当たりにした遺子は臓腑の投擲を止めて武装を確と握り、今までの滞空が嘘のように重力に身を任せ落下しはじめた。

その瞬間を見逃す狩人ではない。それを理解できぬ遺子ではない。二者の殺意が、着地の瞬間に交錯する。

遺子が咆哮し、空中で臓腑武装を振りかぶった。いかなる攻撃をも上から叩き潰す気迫と、それを成しえる力を秘めた一撃。落下の威力をも加えたそれは、先の臓腑投擲を隕石とすれば正に迫る星が如き。それでも狩人は止まらぬ。手にした仕込み杖を夢へと送り、次に握りしめるは、斧。

遺子と衝突するその瞬間に僅かによろめくような歩みを踏んだ狩人はそのまま両手で斧を握り、横に一回転しながら、全力で斧を振りぬいた。

受けたあまりの衝撃に、遺子が大きく吹き飛ばされる。その瞳は交錯の瞬間を一分の見落としもなく捉えていた。狩人の振るった斧の柄が遠心力によつて伸び、遺子の振るった臓腑武装を真っ向から弾き返した瞬間を。

——狩人が武具のひとつ、〈獣狩りの斧〉。かつては森で木こりが振るっていたであろう斧を、獣に対して振るうべく生まれ変わらせた狩り道具。並の剣では歯が立たぬ獣の皮膚をその重みによつて断ち切り、頭蓋を砕き、多くの獣を打ち倒してきた特に普及した得物のひとつ。

並の狩人が振るっても獣に致命を与えうるそれは、変形させることにより柄を伸ばし、遠心力によつて更に破壊力を向上させた今、比類なき剛力を持つかの狩人の手によつて上位者とも真っ向から打ち合うほどの力を発揮する。

怒りと共に遺子が振るう臓腑武装の刃。それに対して、一撃。あまりの衝撃に海岸を理不尽な金属的衝突音が満たし、遺子の手より武装が離れる。だが驚愕するそぶりもなく、へその緒で繋がった武装を遺子が腕の動きで引き戻し、そのまま振るう。二撃。またしても全力で振るわれた斧に臓腑武装は弾き返される。

そして、狩人が踏み込み、三撃。しかし遺子はその場を飛び退き致命的な縦斬撃を回避する。もはや斧では遺子に届かぬ間合い。それを即座に見て取り遺子は態勢を立て直すべく砂を踏みしめる。その

様な余裕を狩人は許さぬ。

夢へと去った斧を握っていた手に握られるのは、再びのへノコギリ鉈。投擲した毒メスや火炎壺を伴い、加速に乗って狩人は迫り、折りたたまれたノコギリによって二度の斬撃を遺子の腹に見舞う。飛び散る青ざめた血に顔を濡らし、更には投擲物を身に受けたたら踏む遺子に狩人は手を緩めぬ。鋸から鉈へ。振り翳す一撃で、頭蓋を砕く。狩人が息を止める。目を細める。遺子が顔を上げる。見据える。狩人の瞳に危険が映る。

遺子の振り抜いた左手が鉈の横つ面を叩いた。溜めの無い、しかし強力な一撃に鉈は弾かれ砂浜を抉る。遺子の手の甲から血が滲み、狩人は驚愕に退避を一手遅らせた。

即座に遺子が懐に入る。そして、二撃。短く握った臓腑武装によって、狩人の腹に二度の斬撃を見舞う。即座に狩人は理解する。己の、先ほどの二度の斬撃。これはその焼き直し、模倣、複写だ。

いや、鉈を弾いた左の裏拳。あれもまた、自身がヘガラシヤンによって行った弾きの模倣ではないか。その気づきに背筋に悪寒が走る。学習している。唯一、遺子が狩人に劣っていた「技」を、この狩りの中で急速に習得し始めている——!!

戦慄に心中を染めながらも、狩人はもう一度手を遅らせることは無かった。即座に散弾銃を握り締め、発砲。遺子の追撃を防ぎ、再び己が攻める側に回らんと画策する。

だが、遺子には通じぬ。今までへその緒の伸縮に任せ最大射程で振り回すばかりだった臓腑武装のへその緒を短く持つて高速で振り回し、それによりて迫る水銀散弾を全て弾き散らす。

『まただ』と狩人は臍を噛んだ。これもまた、降り注ぐ肉片を仕込み杖にて撃ち落とした、狩人の杖術の模倣だ。

己の手札を切れれば切るほど、それは遺子の血肉となり、自らの首を絞めてゆく。己の技術によって瞬間瞬間の勝利を重ね、遺子を討ち果たす選択肢は失われた。ならば。

狩人は既に次の手に移っていた。己の血を握りこむ。手の内に、血の弾丸を生み出す。遺子は既に咆哮の命じを下していた。天が応え、

雷が閃く。遺子の頭上へ。

跳躍した遺子が、臓腑武装を掲げ持つ。そこへ降り注いだ雷が、遺子よつて掌握され輝きを放った。それを、振り下ろす。莫大な電荷を纏つた臓腑武装が、へその緒によつて射程を伸長し、狩人へ叩きつけられる。

上位者の子たる遺子の、神秘と、力と、技。その全てを重ねた一撃。狩人は驚愕した。しかしそれは刹那の驚きだった。すでに血液弾と水銀弾を装填された狩り道具を握つた左腕で、真正面から迎撃する。

電荷同士が反発し、火花のように雷が散つた。大きく弾かれた臓腑武装。用いた狩り道具——へ小さなトニトルスへごと炭化し、崩れる狩人の左腕。もはや人には成しえぬ力に、狩人は人の叡智と狂気と執着と、己の技で抗い、退けた。その代償は、あまりにも大きかつた。

遺子は臓腑武装を弾かれた衝撃など無かつたかのように、空を踏んで狩人へと襲い掛かる。臓腑武装は既に手の内へ。迫る遺子は、すでに致命の間合い。狩人は動かない。肉の刃が、その肩口に食い込んだ。

鮮血が吹き上がった。袈裟に入った臓腑武装は胸を抜け、狩人の鳩尾まで達していた。狩人がマスクの中に血を吐き、それが喉元へと流れ出す。遺子の死人の肌を鮮血が濡らし、降る雨がそれを流す。潮に塗れた砂浜に、狩人の血潮が染み込んでゆく。空の輸血瓶が二本、そこに落ちて突き刺さる。

遺子は目を見開いた。ごぼごぼと血を吐きながら、狩人が爛々とした目で遺子を見上げていた。

ぴゅう、と場違いな、風の抜ける音。

遺子はその瞳にて危機を察知し、その場から飛び退こうとする。だが、狩人の体を半ばまで裂いた臓腑武装が抜けぬ。遺子にそれを手放すことはできなかつた。未だ繋がりが続ける、母との縁。対する狩人は、啞えていた。古びた秘儀、へ連盟へで得た縁、小さな笛を。

砂浜を裂いて、大蛇のあぎとが狩人と遺子を飲み込んだ。

——へマダラスの笛へ。禁域の森に生きた双子と友誼を結んだ、

大蛇を呼び出す笛。腑分けされた獣を食って育った大蛇は、悪夢を越えて笛に応える。果たして、音によりて彼方への呼び声とするそれは、狩人の用いる鐘と何が違ったのであろうか。

だが、今まで数多の獣を、狩人を喰らってきた大蛇の頭部は内側より裂かれ、炸裂した。不条理なまでの腕力を振るいて、遺子は蛇の啞内より逃れたのだ。蛇の肉片と血がぶちまけられて砂浜を赤く染め、しかしそれも悪夢の中に消えてゆき、遺子は臓腑武装に付着した血と肉を振るって払う。そこに狩人の姿は、無い。

そう、遺子は啞内より逃れた。狩人は？ 蛇に飲まれたか？ 蛇と共に裂かれたか？ そんな、相打ち覚悟の秘儀であったか？

……否。狩人は己に入れていた。かつて手渡された女医療者の精製液と、悪夢の実験棟で手にした聖女の血を。狩りを諦める事など、毛頭認めていなかった。

途方もない暴力を振るい終え一瞬硬直した遺子の頭部に瓶がぶつかり、砕けた。黒い粘性の液体が付着し、遺子の肉眼の視界を塞ぐ。だがしかし、上位者たる遺子の啓かれた瞳は、己の背後に立つものを認め、空を引き千切るような威力で臓腑武装を振りぬかせた。

背後に立つは狩人。微動だにしない。遺子の刃が迫る。だが、限界まで狩人は構えていた。己の狩人としての歴史の中で、最も直近に手に入れた仕掛け武器を。窠やっしの弓を。

臓腑武装が届く生死の縁ふちで、狩人の放った矢がほんの僅かに早く遺子の胸に突き立った。

愚かなものだ、弓で獣を挑むなどと。そう嗤ったものは畏れたのだろう。弓で獣を狩って見せたなどと。しかし嗤ったものも、嗤われたものも既にいない。そしてこの狩りの後に、それを嗤うものが現れることは無いだろう。それを証明するような一矢であった。

受けた矢に、遺子は怯み、姿勢を崩す。虚を突かれたこと、何よりも——上位者には到底理解しえぬ、おぞましき人の遺志の継承。人として生まれ、今も半ば狩人として在る赤子と、上位者の胎より這い出した、悪夢の心臓たる赤子には、決して超える事の出来ない溝が、確かにあった。

その事実を、二体の怪物は知ることは無い。もはや、生まれた隙はあまりにも致命的すぎた。既に弓剣を夢へと送った狩人が構えるは、この悪夢からは遙か未来の、偏屈者ども火薬庫の最高傑作、複雑極まる鉄の塊。

〈パイルハンマー〉。攻撃手段——狩りの幅を広げるための仕掛けではなく。人知を超えた威力を生み出すために、形作られた機構。手段と目的を取り違えたもの達の熱狂が生み出した、人の業の結晶。叩きつけた拳、その衝撃で、仕掛け武器が起動する。3つの血晶石、その全てを炎の属性に偏らせた、ただ一撃のための力が、炸裂した。

爆発がほんの一時、降り注ぐ雨を吹き散らした。

崩れた姿勢の遺子に対して、最大限の力を溜め込んだ上での一撃。浴びせた油さえも利用して炎の威力を途方もなく高めたそれは、あまりにも無慈悲に、遺子の上半身と下半身を分かち吹き飛ばした。

風のように静かに、しかし止まず寄せ返す波打ち際。肌を濡らすような穏やかな雨の中、掠れ、散りゆく遺子の名残に目を向けることも無く、狩人は歩いた。

葬送は成されたのか。それは真に弔いたりえるものなのか。かの助言者が尊んだそれを、確かに遂げることが出来ているのか。半ば、上へと踏み込んだ狩人には確信できることではなかった。

目前には、巨大なる、偉大なるものの亡骸。人ならざる形質、白肌、触手、しかし確かに存在する、女の顔。

〈ゴース、あるいはゴスム〉。その亡骸の上に湧き上がる影。それこそが悪夢の心臓、ゴースの遺児か、或いは、真なるゴースの遺志なのか。三本の三本目を得て瞳を啓きながら、未だ、人の軀を外さぬ狩人



にはわかりえなかった。

故に、音もなく降る雨のように、穏やかに右手を振りぬいた。影は散り、その掌の中には、得体の知れぬ寄生虫のみが残った。

そのまま立ち尽くし、遠い輝きを眺め、思案に耽る。この地、遺子、ゴース、この血、己、狩人、ヤーナム、獣、悪夢、全てを。

遺子が己に立ちはだかった意味。己が遺子に挑んだ意味。母胎の内での微睡みから目覚めたそのの、眠らずして悪夢の深淵へと昇り来た己の。

しばらくして——意味のある、或いはない、数多の悪夢的思索を経て——狩人は理解した。遺児が求めるのは母の亡骸ではなく、羊水たる満ち満ちた海でもない。霧の向こうに輝く太陽の如き光の輪郭。すなわち、夜明けに他ならぬのだと。

そう、傲慢に納得して、身勝手に結論付けて、己に言い聞かし、狩人は踵を返した。背にした上位者の軀は変わらず、動くことはない。霧がかつた空に輝く光に、もはや振り返ることも無い。

狩りはまだ終わっていないのだから。地の底で、海の縁<sup>へり</sup>で、悪夢の淵で、それは成された。だが、まだ空に座すものが残っている。我が元へたどり着くと、切実に願うものが己を待ちわびている。

それはおそらく、最もおぞましき戦いになろう。血と、肉と、夢と、呪詛。全てが渦巻く、凄惨な殺し合い。

もはや遠き、波打ち際の静寂を背にしながら狩人は思った。その戦いを超えた先、己は、遺子が夢見たような、少し明るい夜明け<sup>まみ</sup>に見えることができるのだろうか？

——否。空より見下ろし、運命を手繰る魔物を狩り滅ぼしたとて、夜が明ける保証など無い。それこそ、終わらなき夜への、第一歩となるやもしれぬ。悪夢とは、巡り終わらぬものであり、月など、この夜空にある星の中で最も近くにある、たった一つにすぎぬのだから。

そう、果てなど無い。狩人たる己が、その瞳で狩るべきものを見定めることが出来るうちは。

獣狩りの夜が、終わることはない。